

天竜川上流域の過疎問題

山口通之



### 昭和32年頃の遠山谷上村下栗の風景

家にも山畑にも手入れが行き届き活気すら感じられる

写真：向山雅重資料より

# 天童川上流域の過疎問題

山口 通之

## 目次

はじめに	3
一、「過疎」とその分布	4
① 「過疎」という言葉の登場と教科書	4
② 過疎法をめぐる動向	6
③ 過疎地域の分布	8
④ 県下の法過疎地域の概観	9
⑤ 下伊那地域は県下の過疎卓越地域	10
二、下伊那地域の過疎化の要因	11
① 災害危険箇所が多い―その地形と地質―	12
② 山林が多い中での第一次産業の弱体化	14
③ 人口構成の変化―生徒数の減少―	15

## 三、過疎と人口・集落

―人口移動と集落整備(移転)事業―	18
① 飯田市とその周辺地域への人口集中	18
② 過疎法の下での集落整備(移転)事業	19

## 四、過疎と産業―下伊那地域を中心に―

① 林業の現状と動向	21
② 農業生産の歩みから	26
③ 工場誘致とその特徴	28

## 五、過疎と災害―上・下伊那地域の事例から―

① 大鹿村―三六災害―	30
② 高遠町荊口地区―台風災害―	33

## 六、過疎と開発―上・下伊那地域の事例から―

① ダム建設―長谷村―	34
② 観光開発と村づくり―浪合村―	38

## まとめにかえて

	43
--	----

題字 間宮秀介

## はじめに

「過疎」という言葉を耳にするようになってから、かなりの時間が経過している。筆者が過疎問題に関心を持つようになったのは、高校の社会科教育（平成六年度より実施の新学習指導要領では社会科が解体し、地歴科と公民科に分離）とのかかわりからである。それというのも、戦後の日本の経済や地域の歩みを教材化する折、昭和三〇年代から第一次オイルショックまでをひとくくりし時期区分し、「高度経済成長期」（以下高度成長期）と巨視的に扱うことの不自然さをしばしば感じたからである。また、過疎現象の扱いが、その対局の過密や、当時頻発した公害などと並んで、高度成長の歪みとして派生した事象にすぎないかのような視点での扱いに対する疑問からでもあった。

さらに、高度成長期に太平洋ベルト地帯に代表される重化学工業地帯の発展の一方で、県下各地に目を移せば、とりわけ農山村からの人口流出、第一次産業の崩壊ともいえる現象が相次いでみられたこと、この両極端ともいえる現象を教材の中でどう体系化し、整合して扱うかという点であった。地域（地方）の発想からすると、高度成長期は、

地域（地方）によっては経済や生活基盤はもとより、自治の衰退の過程であり、都市（中央）との諸矛盾が最も表面化し激化した時でもあったといつてよいのではないか。

少しく過疎地域の歩みに目をやれば、高度成長期やバブル経済下の好況時には、過疎地帯が「地域の活性化」という名のもとに、とりわけ大資本の観光開発の対象地となり、逆に一度にわたるオイルショックや円高不況、バブル経済の崩壊過程では、それら資本が容赦なく撤退したり、開発断念に至った事例が数多い。その点では、過疎地域の開発が植民地型・外来資本依存型開発にあまりにも偏ってきた故に、その時々の矛盾の集積地となってきたといつても過言ではなからう。

一方で、過疎化の進展の中、住民の力で地域の再生に向けて、地域おこし・村づくりなどといわれる様々な取り組みが盛んに行われつつあることも見逃せない。それは行政の補助金依存（中央依存型）や外来の大資本に開発をゆだねる（外来型開発）方向から、住民の力で地域の資源や文化に根ざした開発（内発的発展）を指向する動きといえよう。このように過疎地域の動向は多様である。

ここでは、天竜川流域の中で長野県内の天竜川上流域に限定し、過疎化の現状とそれにかかわる問題を、いくつか

の事例（人口・集落移転・産業・災害・開発・教育など）から追ってみたい。過疎脱却に向けた取り組み（地域づくり）については、紙面の都合により少々扱いにとどめた。

## 一、「過疎」とその分布

### ① 「過疎」という言葉の登場と教科書での扱い

「過疎」という言葉がはじめて使用されたのは、国民経済審議会の地域部会の中間報告書（昭和四一年）であるといわれる。国土庁の「過疎対策の現況」（平成二年版）では、「公文書の中で初めて使われたのは、昭和四二年三月の経済社会発展計画（閣議決定）の中で、次いで経済審議会地域部会報告（昭和四二年十一月）であった」と記されている。要は高度成長期の四〇年代前半に登場し認識されるようになったという点である。同部会報告の中では、過疎問題を次のように述べている。

……人口減少地域における問題を「過密問題」に対する意味で「過疎問題」と呼び、「過疎」を人口減少のために一定の生活水準を維持することが困難となった状態、たとえば防災、教

育、保健などの地域社会の基礎的条件の維持が困難になり、それとともに資源の合理的利用が困難となって地域の生産機能が著しく低下することと理解すれば、人口減少の結果、人口密度が低下し、年齢構成の老齢化がすすみ、従来の生活パターンの維持が困難となりつつある地域では過疎問題が生じ、また生じつつあると思われる。……

その他の扱いの例として、辞典と高校の教科書ではどうか。広辞苑（岩波書店）では、過疎と過密の両方が第二版（昭和四四年版）から登場してくる。高校の現行の社会科の教科書でみると、過疎問題は「政治・経済」、「地理」、「現代社会」のいずれでも扱われている。その中で、現代の課題という点からも扱うにふさわしいと思われる「現代社会」の教科書について調べてみた。この科目は、昭和五七年度から教育課程の中に必修科目として初めて設けられ、論議を呼んだもので、平成六年度からの新学習指導要領では社会科解体の中で公民科に属し、選択科目となる。五七年度から使用された一六冊の教科書では、過疎をすべての本で取り上げている。扱いは「人口問題」の項目の中で、過疎を過密と対比しつつ、人口分布・密度・移動という視点でふれている場合が多い。また平成六年度から採用の公民科の「現代社会」の教科書七冊（七社）について調べて